

沖縄離島地域住民が有する「共同体像」の抽出： 移住者の地域社会融合を促進する要因に関する研究

Capturing the representation of rural community from the perspective of local residents in Okinawan island: Implication for building social cohesion among locals and immigrants in rural communities

杉本 あおい*・杉野 弘明**・八木 信行***
Aoi SUGIMOTO, Hiroaki SUGINO and Nobuyuki YAGI

要旨：地域活性化方策の一つとして移住者の受入れ促進の有効性が一般的に認められているが、沖縄においては移住者増加は先住者らとの軋轢も生じさせていることが報告されてきた。そのような中で現代沖縄村落の発展方策を検討していく際、実際に地域に居住する移住者を含む住民たち自身が共同体をどう認識しているかを理解することなしには、理想的な方策の議論を進めることは難しい。そこで本稿は地域住民たちの視点による「共同体像」を自由記述法の質問を用い実証的に明らかにし、それにより移住者の地域融合のために重要な要因について提言することを目的とした。石垣島白保地区を対象地とし、得られたデータを量的・質的にテキスト分析した結果、住民たちにとっての理想の共同体像とは「生活・自然環境」「文化・伝統」を持続・発展させていくために「地域自治能力」と「人づきあい」がよく機能している状態であることを示した。この結果に基づき、移住者の地域融合にとって重要な要因について提言した。

キーワード：共同体像, 沖縄村落, 先住者と移住者, 量的・質的テキスト分析

1. 研究の背景と目的

日本は 6,852 の島々から構成される海洋島嶼国家であり、周囲に約 420 もの有人離島を擁する。これら地域は離島関係諸法により、領海・資源の利用保全, 文化多様性継承, 食料安定供給といった日本国民にとっての重要性を有することが認められている。特に沖縄は沖縄振興計画において日本の環境共生型社会のモデルにもなり得るとして¹⁾、地域の持続・活性化の重要性が議論されている。地域活性化方策の 1 つとして移住者の受入れ・定

住促進の有効性が全国的に認められている²⁾。沖縄においては「移住ブーム」とも呼ばれる他県からの移住者増加が 1980 年代頃から継続してきた。しかしこれは地域コミュニティとの間の軋轢も生じさせてきたことが広く指摘されている³⁾⁴⁾⁵⁾。須藤⁵⁾はこの軋轢を、沖縄と日本本土間に存在する歴史的な深い溝が移住ブームによって「顕在化した」ものであると解釈した。またこの移住者増加という社会現象は、沖縄の村落共同体のあり方そのものも変容させていることが指摘されている。

*学生会員 東京大学大学院 博士課程 **正会員 同左 特任助教 ***非会員 同左 教授

共同体という概念の定義は曖昧・複雑多岐にわたるといふ議論は新しいものではない⁹⁾⁷⁾が、とりわけ沖縄では、日本復帰以降県外からの移住者増加や沖縄の本土化といった社会現象が広まる⁸⁾中で、既存研究の多くがより原初的で自己完結的な「村落」を好んで研究対象にしてきたと指摘されている⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾。その中で例えば石附¹²⁾は、“ヤマトウンチュ嫁(ユミ)”と呼ばれる、沖縄の男性と結婚した在沖本土出身の女性に注目することで、沖縄文化・社会の現代的状況の捉え直しに試みた。また吉田¹⁰⁾は石垣島の伊原間地区の移住者の問題に着目し、先行研究において主流であった「地縁的・血縁的紐帯の累積としての」村落観を修正するための試論を提示した。このように現代の沖縄においては、地域活性化のための移住者の受入れ・定住促進の流れがあるのと同時に、多くの移住者を含む現代村落をどのように捉え、またいかに地域への移住者融合とそれによる地域活性化を実現していくか、という課題が存在していると言える。

移住者を多く含むのが現代沖縄村落の実態である。そうであるとすれば、実際そこに居住する移住者を含む住民たち自身が「共同体」をどのように捉えているかを明らかにすることは、その発展方策を検討するための議論の土台として重要である。しかしながら、住民たち自身の視点による共同体像を実証的に明らかにした研究は未だなされていない。そこで本稿は、移住者を含む住民たちの視点による現代沖縄村落の共同体像を明らかにし、それにより移住者の地域融合のために重要な要因について提言することを目的とする。

2. 研究の方法:データ収集, 分類, 解釈

本稿は沖縄県石垣市白保地区(図1:詳細後述)を対象地とし、住民たち自身による共同体像を明らかにするという研究目的に則り、当地区で住民の村落に対する認識を尋ねるインタビューを実施した。移住者を含む現代沖縄村落に関する先行研究⁹⁾¹⁰⁾¹²⁾はいずれも、綿密な文献調査と参与観察、半構造型インタビューで収集したデータを質的に解釈するという方法論によりなされていた。本稿ではこれら先行研究の知見および筆頭著者がこれまで蓄積してきた質的調査¹³⁾¹⁴⁾の知見を活かしつつ、データ収集には3問の構造型インタビュー項目を用いた(表1)。まずQ1で過去と比較した現在の村落に対する住民の認識を5件法の質問で尋ね、Q2では自由記述法を用いその認識を有する

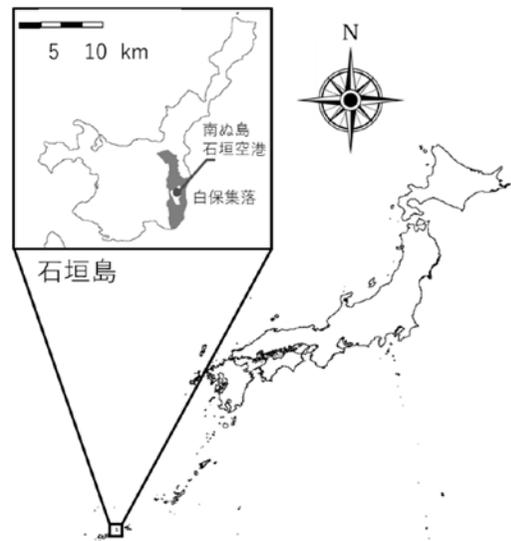


図1 調査対象地の位置

表1 利用した構造型インタビュー項目

Q1. 白保は昔(たとえば10年前)よりもいい村になったと思いますか？

もっとも近いもの1つに丸(O)をつけてください。

1. 全くそう思わない	2. そう思わない	3. どちらともいえない	4. そう思う	5. とてもそう思う
-------------	-----------	--------------	---------	------------

Q2. 上のように思われるのはなぜですか？理由をおしえてください。

Q3. 白保が将来(たとえば10年後)、今よりもいい村になるためにはどんなことが必要だと思いますか？あなたの考えを自由に書いてください。

理由を尋ねた。さらに Q3 では現在と比較した将来の村落に対する認識を自由記述法で尋ねた。このように過去と比較した現在、現在と比較した将来、という 2 方向から村落に対する認識を尋ねることにより、双方の結果を相互に検証材料とできるように設計した。自由記述法は回答者が調査者の問題意識の枠に規定されたり、また調査者の意図を読み取るリスクの低い手法とされている¹⁵⁾。そのため、住民たち自身の視点による共同体像を明らかにするという本稿の目的に適していると判断した。

得られたテキストデータはまず、Q2 と Q3 それぞれの回答ごとに最小単位の意味のまとまりに分類した。分類手法として計量的テキスト分析のためのフリーソフトウェアである KH コーダー¹⁶⁾¹⁷⁾を用いた自己組織化マップによる量的分類、および KJ 法¹⁸⁾¹⁹⁾による質的分類の双方を実施した。自己組織化マップは数理的に高次元の情報を 2 次元に縮減した上で可視化するための手法であり、意味上で類似性の高い情報を空間上でも近接して表示する²⁰⁾。これに対し KJ 法は調査者・観察者自身が情報を同質性に沿って要約していく手法である¹⁸⁾¹⁹⁾。テキスト分析の研究においては量的・質的手法を断絶した排他的なものとしてでなくむしろ連続的に捉え²¹⁾、双方を循環的に活用することでより深い考察が可能となる²²⁾という考えは新しいものではない。本稿においてもこれら量的・質的手法の双方を循環的に用いることで、筆頭著者がこれまで蓄積してきた質的調査¹³⁾¹⁴⁾に基づく研究者とデータとの密接さを確保しつつ、客観性を持った結果の提示という量的手法の利点も活用し²³⁾、より深い考察を目指した。

分類作業の後、それらのまとまりをさらに KJ 法を用いて統合化¹⁸⁾¹⁹⁾した。なお KH コーダーおよび KJ 法による分類の過程においては住民の出身地、年齢等の属性情報を含めず回答内容のテキ

ストのみを分析対象とした。これは、先住者・移住者双方を含めた総体としての共同体像を抽出するという本稿の目的に則ったものである。そしてその後分類結果の解釈、および統合化の際には再び個々の回答内容に回答者の属性情報を紐づけた上で解釈を進め、本稿への記述においても属性情報を明記した。これにより、先住者・移住者を合わせた住民が有する共同体像を総体として抽出しながらもその細部において属性や個人の間で多様な意見が存在していることを描くことを企図した。KJ 法による分類と統合化の作業は筆頭著者が 2016 年 4 月から 7 月にかけて行い、その後 2 名の共著者により解釈の妥当性を確認した。さらに、先にも述べたようにこの過程においては KH コーダーによる量的分類の作業も併用し、両者を循環的に実施した。これらの分類・統合化作業により、住民にとっての共同体像を形成する要素を特定した。その後、要素間の関係性を考察することで住民たちにとっての理想の共同体像を定義することに試みた。そして最後にこの共同体像の定義を踏まえ、移住者の地域融合のために重要な要因について議論した(図 2)。

調査は 2016 年 2 月 12 日から 24 日までの間に石垣市白保地区にて、住民 57 人を対象に行った。

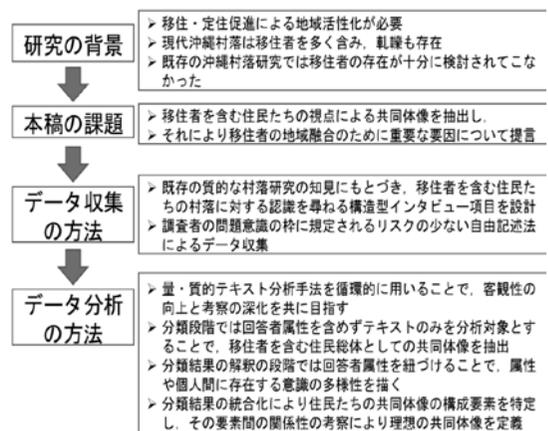


図 2 本稿の課題と手法に関する重要点のまとめ

調査対象者は村落の社会経済的構造に沿うよう層化抽出法を用いて選定し(表 2)、公民館などの村落自治組織や著者らと予め面識のあった住民たちを介して集めた。

3. 研究の結果

3.1 調査対象地概要

調査対象地である白保には現在約 1600 人が居住²⁴⁾²⁵⁾する。表 3 に示される当地区の人口・就業構造の過去 10 年の推移から、総人口としては微減、世帯数は微増しているのがわかる。農業従事者は石垣市全体と同様に減少傾向にあり、他方で運輸、小売、医療・福祉業といったサービス業の従事者が増加傾向にあるのも市全体の傾向に沿っている。このように、白保ははまだ農業従事者数の最も多い農業村落であると言えるが、その中でも就業構造の多様化が見て取れる。また当地区北部には 2012 年に「南ぬ島石垣空港」が開港している。これにより 2014、2015 年には 2 年連続で推計観光客数は 100 万人を超え、「新石垣空港特需」と呼ばれる好景気がサービス業を中心に生じている²⁴⁾ こともこの就業構造変化に影響を与えていると考えられる。住民のうち出生時から村落に居住しているのは 265 名(約 16.5%)にとどまり、居住年数 10 年未満の住民が 858 名と人口の過半数(53.4%)を占める²⁵⁾。住民の出自別構成と

表 2 調査対象者の構成^{注1)}

		調査対象者	母集団
男女比 (M : F, %)		59.6 : 40.4	49.4 : 50.6
年代別人口構成比 (%) * 全人口に対する各年代の占める人口割合	20-29	5.4	5.6
	30-39	33.9	10.6
	40-49	23.2	12.3
	50-59	17.9	15.1
	60-69	12.5	14.8
	70-	7.1	20.4
	計	100	78.8
出身地別人口構成比 (%)	先住者	50.9	60.0
	沖縄他島からの移住者	29.8	30.0
	他県からの移住者	19.3	10.0
	計	100	100

しては、戦前・後に沖縄他島から移住してきた住民の子孫(以降、「沖縄他島からの移住者」)が約 3 割、戦後に他県から移住してきた住民(以降、「他県からの移住者」)が約 1 割を占めるとされる¹³⁾¹⁴⁾。現地の認識では沖縄村落の精神的中核とされる宗教的聖域の御嶽²⁷⁾に帰属する者が「ほんとの白保の人」と呼ばれる先住者であり、これは従来の沖縄村落研究が村落の構成員として中心的に扱ってきた、「系譜関係をその世界観の一部に持つ地縁的あるいは血縁的紐帯で結ばれた人びと」¹⁰⁾とも重なる。公民館活動、祭などの村落運営はこれらの住民たちに出身の別に関わらず担われているが、意識の上では先住者・移住者の間には境界があり、時に軋轢も生じていた¹³⁾¹⁴⁾。しかし同時にこの境界は固定的なものではなく、時に移住者であっても先住者と同一視されることが観察された。例えば白保でサンゴ礁保全活動に取り組む NGO 代表者は「近年では沖縄他島から来た 2、3 世の人たちはもう『白保の人』でいいんじゃないかという話になっている」と語った(2015 年 9 月筆頭著者フィールドノート)。吉田¹⁰⁾も伊原間地区にて、先住者と移住者は対立する概念でなく連続性を有していると述べている。このように白保を含む石垣島の村落では、村落は先住者のみが構成するものとする村落観と、移住者もまた時に先住者と同一視され、村落は移住者も含めて構成されるものとする村落観とが併存している様子が観察された¹³⁾。

3.2 Q1 回答結果

Q1 結果は「3. どちらとも言えない」の回答者が 63%を占め、その後 4(16%)、2(10%)、5(9%)回答なし(2%)、1(0%)が次いだ。

表 3 石垣市と白保地区の人口，就業構造の推移(単位：人) 出典：総務省統計局²⁵⁾から筆者作成

	総人口	世帯数	農業	林業	漁業	鉱業	建設業	製造業	電気、熱供給業	情報通信業	運輸業	卸売、小売業	金融、保険業	不動産、物品買付業	宿泊業、飲食サービス業	医療、福祉業	サービス業	学術研究、専門・技術サービス業	教育、学習支援業	公務	その他	
2005	石垣市	45183	17798	2079	5	321	23	2353	995	98	164	1068	3168	266	149	2658	1849	3360	分類なし	1003	1349	502
	白保地区	1659	594	192	2	9	5	62	29	4	3	25	70	9	1	61	57	102		27	28	16
2010	石垣市	46922	19212	1655	14	288	22	2071	1097	105	197	1268	2985	215	334	2602	2068	1308	661	1002	1182	2238
	白保地区	1600	606	133	0	8	3	59	38	1	5	43	69	5	9	47	69	39	19	23	20	73
2015	石垣市	47564	20514	1787	14	274	10	1893	1211	112	197	1142	3093	236	442	2817	2523	1508	647	1070	1497	1181
	白保地区	1606	628	161	1	7	1	54	36	3	8	39	81	3	17	64	86	56	16	27	31	40

3.3 Q2 回答結果の分類

3.3.1 Q2 回答の KH コーダーを用いた分類

Q2 回答結果は自己組織化マップにより 8 クラスターに分類され、各々図 3 に示される語を含んだ。

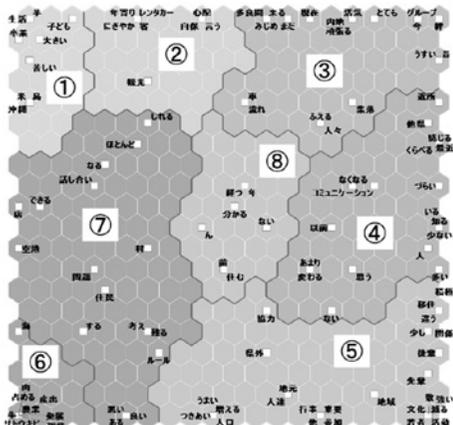


図 3 Q2 回答の自己組織化マップによる分類

3.3.2 Q2 回答の KJ 法を用いた分類

Q2 回答結果は KJ 法を用い 4 つの意味のまとりに分類された(図 4)。意味のまとりは「人づきあいの変化(29 回)」「文化・伝統をめぐる葛藤(8 回)」「生活・自然環境(の向上/劣化)(24 回)」「地

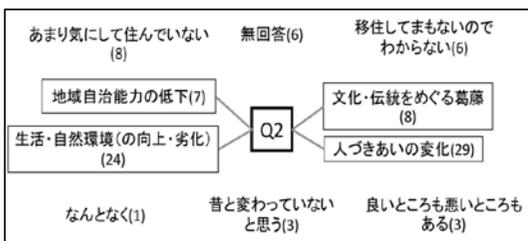


図 4 Q2 回答の KJ 法による分類

域自治能力の低下(7 回)」が抽出された。これらのまとりに含まれなかった、あるいは回答が具体的に意味する内容が特定できなかったのは「あまり気にして住んでいない(8 回)」「移住してまもないのでわからない(6 回)」「昔と変わっていないと思う(3 回)」「良いところも悪いところもある(3 回)」「なんとなく(1 回)」「無回答(6 回)」であった。

3.4 Q3 回答結果の分類

3.4.1 Q3 回答の KH コーダーを用いた分類

Q3 回答結果は自己組織化マップにより 8 クラスターに分類され、各々図 5 に示される語を含んだ。

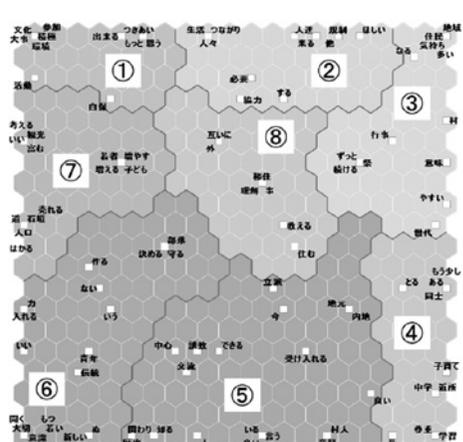


図 5 Q3 回答の自己組織化マップによる分類

3.4.2 Q3 回答の KJ 法を用いた分類

Q3 に対する回答は KJ 法を用い、「住民間のまとり・協力(30 回)」「伝統の継承・発展(16 回)」「生活・自然環境の保持・向上(12 回)」「地域自

治能力の向上(12 回)」「次世代育成(17 回)」の 5 つの意味のまとまりに分類された。なおこれら 5 つに含まれなかった、あるいは回答が具体的に意味する内容が特定できなかったのは「現状維持(1 回)」「無回答(8 回)」であった(図 6)。

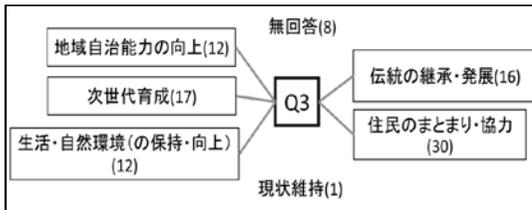


図 6 Q3 回答の KJ 法による分類

3.5 Q2 分類結果の解釈

3.5.1 自己組織化マップ分類結果の解釈

Q2 回答について自己組織化マップにより分類された 8 クラスターに関して、それぞれ表 4 のとおり意味を解釈した。②「観光発展による功罪」③「移住者増加や時代の変化による地域社会経済への功罪」④「移住者増加によるコミュニケーションへの違和感」⑤「伝統や人づきあいのあり方をめぐる葛藤」⑦「住民間対立の和解と併存」の 5 つのクラスターはいずれも、移住者増加や観光業、生活の向上を評価する一方で、同時にそれらがもたらした地域社会の伝統や人づきあいへの影響に戸惑いや危惧を感じている住民たちの意識を

表していたと言える。また、クラスター①「多良間島から移住し生活向上」⑥「地域経済発展」はそれぞれ生活、地域経済の向上という肯定的意識を表しているが、これは②③のような、地域産業・経済の発展による功罪を表すクラスターの意識群から見ればやはり戸惑いや危惧の元になっている要素だと言える。つまり Q2 の⑧「移住してまもないのでわからない」を除くクラスターはすべて、生活や経済の向上への評価と、同時にそれらがもたらした地域社会の文化、社会関係、生活・自然環境への影響に対する戸惑いという、互いに相反し葛藤する住民の意識を表しているものとまとめることができた。

3.5.2 KJ 法分類結果の解釈

KJ 法を用いた Q2 回答の分類結果からは、4 つの大きな意味が抽出されたが、これらのまとまりの内部にはいずれも、それぞれのトピックに対する肯定的・否定的双方の意見が、それぞれ次のように表出されていた。「人づきあいの変化」については、「村の人だけでなく、他県からの人も増え、誰でも住みやすい村になってきたと思う(30 代・先住者)」など、移住者の地域融合を示す肯定的な記述内容があった一方で、同時に「他県からの居住者が増えてコミュニケーションが取りづらい(70 代～・先住者)」といった否定的な記述も表出

表 4 Q2 の自己組織化マップで得られたクラスターの解釈一覧

クラスター	①	意識群の解釈	多良間島から移住し生活向上																								
		含まれる単語	芋	生活	卒業	子ども	大きい	苦しい	米	島	沖縄																
	②	意識群の解釈	観光発展による功罪																								
		含まれる単語	年寄り	レンタカー	にぎやか	客	心配	自保	言う	観光																	
	③	意識群の解釈	移住者増加や時代の変化による地域社会経済への功罪																								
		含まれる単語	多良間	来る	みじめ	まだ	現在	内地	頑張る	活気	とても	グループ	今	絆	うすい	昔	車	流れ	ふえる	人々	集落						
	④	意識群の解釈	移住者増加によるコミュニケーションへの違和感																								
		含まれる単語	近所	他県	感じる	最近	くらべる	づらい	コミュニケーション	なくなる	いる	知る	少ない	人	多い	以前	あまり	変わる	思う	ない							
⑤	意識群の解釈	伝統や人づきあいのあり方をめぐる葛藤																									
	含まれる単語	積極	移住	違う	少し	関係	後輩	先輩	数	強い	文化	減る	若者	活動	地域	協力	県外	地元	人達	行事	重要	他	参加	うまい	増える	つきあい	人口
⑥	意識群の解釈	地域経済発展																									
	含まれる単語	海	肉	占める	農業	買出	発展	期待	サトウキビ	牛																	
⑦	意識群の解釈	住民間対立の和解と併存																									
	含まれる単語	しれる	ほとんど	なる	話し合い	できる	店	空港	村	問題	住民	する	考え	残る	ルール	悪い	良い	ある									
⑧	意識群の解釈	移住してまもないのでわからない																									
	含まれる単語	経つ	年	分かる	ない	ん	前	住む																			

していた。「文化・伝統をめぐる葛藤」については、「地域の文化を見直す活動が増えている(20代・先住者)」といった現在の文化・伝統のあり方に対する肯定的な意見があった一方で、同時に「昔ながらの良いルールと悪いルールがそのまま残る事が良いと思っているように強く感じる。(30代・他県からの移住者)」といった、伝統と現代の生活とのギャップへの違和感を示す否定的な記述内容も出された。「生活・自然環境の向上/劣化」については、「新空港ができて、観光客が増えにぎやかになった(30代・先住者)」などの肯定的記述があった一方で、同時に「空港ができ、観光客も増えにぎやかになったが、交通量は増え子どもたちやお年寄りの安全面での心配がある。(30代・他県からの移住者)」など、経済や生活の向上の反面で生じる弊害に対する否定的記述も出された。最後に「地域自治の現状」については、「10年前は子どもの数も減っていたが、最近は内地からの移住者も増えてきているのでいいことだと思う(30代・先住者)」などの肯定的記述があった一方で、同時に「県外の人が増えて良いと思うけど、県外の人達が前に出すぎてるところがあるのでどちらともいえない(40代先住者)」など、移住者増加による先住者たちの主体的な自治の低下を危惧するような否定的記述も出された。

3.6 Q3 分類結果の解釈

3.6.1 自己組織化マップ分類結果の解釈

Q2回答と同様、Q3回答についても自己組織化マップにより分類された8クラスターに関して、それぞれ表5のとおり意味を解釈した。クラスター①「共同作業」②「協力・まとまり」⑧「先住者・移住者の相互理解(主に先住者から移住者への理解、文化の伝達)」はいずれも、地域内で住民同士がまとまり、協力し合うことの必要性を表出した意識群に集約できると考えられた。これは、Q2のクラスター②③④⑤⑦で表出していた、住民の地域の人づきあいのあり方をめぐる違和感や葛藤が止揚され、「まとまり」「協力」といった理想像としての方向性が表出していると解釈できる。次に、クラスター③「伝統の継承」と⑥「伝統の発展」は、伝統の継承・発展の必要性を表出した意識群に集約できる。これは、Q2のクラスター⑤で表出していた伝統のあり方をめぐる葛藤が止揚され伝統を継承しつつ新たな形でそれを発展させていくという理想像としての方向性が表出していると解釈できる。また、クラスター⑤「多様性・外部世界との対話、交流」は、地域住民の自治能力の発展の必要性を表出した意識群である。これはQ2のクラスター③⑤で表出していた観光客や移住者の増加がもたらす功罪への葛藤が止揚され、村の歴史や伝統を改めて学びつつ多様な意見・立

表5 Q3の自己組織化マップで得られたクラスターの解釈一覧

クラスター	意識群の解釈	共同作業																		
		含まれる単語	文化	大事	参加	積極	環境	出来る	つきあい	もっと	思う	活動								
①	意識群の解釈	協力・まとまり																		
	含まれる単語	生活	つながり	人々	必要	協力	する	人達	来る	規制	他	ほしい								
②	意識群の解釈	伝統の継承																		
	含まれる単語	地域	住民	気持ち	多い	なる	村	行事	ずっと	祭	続ける	意味	やすい	世代						
③	意識群の解釈	次世代育成																		
	含まれる単語	もう少し	ある	同士	とる	子育て	中学	近所	尊重	学習	とりいれる	音								
④	意識群の解釈	多様性・外部世界との対話、交流																		
	含まれる単語	地元	内地	立派	今	受け入れる	できる	誘致	中心	交流	良い	村人	意見	いる	言う	良い	人	知る	関わり	歴史
⑤	意識群の解釈	伝統の発展																		
	含まれる単語	部落	守る	決める	作る	ない	いう	力	入れる	いい	青年	伝統	ぬ	新しい	もつ	若い	聞く	大切	意識	古い
⑥	意識群の解釈	地域活性																		
	含まれる単語	考える	観光	いい	富む	若者	増やす	増える	子ども	売れる	石垣	道	人口	はかる						
⑦	意識群の解釈	先住者・移住者の相互理解(主に先住者から移住者への理解、文化の伝達)																		
	含まれる単語	互いに	外	移住	理解	事	教える	住む												
⑧	意識群の解釈																			
	含まれる単語																			

場との交流も同時に促進していくという理想像としての方向性が表出していると解釈できる。そして人口や産業の発展の重要性を表出したクラスター⑦「地域活性」は独立した意味のまとまりになっている。これは Q2 で生活、地域経済の向上という肯定的意識を表していたクラスター①⑥に対応し、やはり生活や経済の向上というのは過去も将来も目指すべき方向性の一つであり続けるものだとして解釈できる。クラスター④「次世代育成」は、Q3 にのみ特徴的に表れた意識群であったと解釈できる。

このように自己組織化マップによる分類結果を解釈すると、Q2 のクラスターには生活や経済の向上がもたらす功罪に対する住民の葛藤が表れていたが、Q3 ではそのような葛藤が止揚された、理想像としての方向性が表出していたと解釈することができた。

3.6.2 KJ 法分類結果の解釈

KJ 法を用いた Q3 回答の分類結果からは、5 つの大きな意味が抽出されたが、その 5 つの意味のまとまりの内部で、Q2 のような肯定的・否定的意見双方の表出は見られず、肯定・否定双方の意見が止揚された内容が表出していた。「まとまり・協力」については、先住者と移住者との関係性について「外からの移住者たちに白保の文化などを理解してもらい、互いに協力しあえばいい村になると思います(50代・沖縄他島からの移住者)」などの記述、先住者間での関係性について「自分達の見栄ばかり気にせず、先輩や後輩が意見をちゃんと見え、また、聞いてくれる人がいれば良いと思う(30代・先住者)」などの記述が出された。「文化・伝統の継承・発展」については、「もちろん、今も良いが、伝統を守りつつ、新しい文化を作りたい(30代・先住者)」などの記述が出された。「生活・自然環境の保持・向上」については、「白

保らしい観光産業を考える(40代・他県からの移住者)」や「空港ができ、国道が危ないので、村中の交通規制をして、穏やかな白保村になってほしい(50代・沖縄他島からの移住者)」などの記述が表出された。「現代世代の自治向上」については「規制する所はしっかりしてほしい。また、他から来た人は、それにしたがってほしい(30代・先住者)」などの記述が出された。最後に、Q3 にのみ特徴的に表れた意味のまとまりとして「次世代育成」があり、「地域文化を尊重し、それを誇りに思いながら子ども達が成長していける様な環境作りをおこなってほしいと思う(30代・先住者)」などの記述が出された。

3.7 Q2, Q3 の量・質的分類結果解釈のまとめ

Q2 の回答結果を分類・解釈した結果、自己組織化マップと KJ 法の双方において、移住者や観光客の増加、生活の向上といった現象への肯定的評価の一方で、同時にそれがもたらした地域社会の変化に対して戸惑いも感じ、その両者の狭間で葛藤している白保住民たちの意識が表出していた。また Q3 回答結果の分類・解釈結果からは、やはり自己組織化マップと KJ 法の双方において、そのような肯定的・否定的双方の意見が止揚された理想像としての方向性を示す内容が表出していた。

3.8 Q2, Q3 分類結果の統合化

本節では、Q2, Q3 から抽出された意味のまとまりを KJ 法を用いて統合化していく。Q2 の「人づきあいの変化」と Q3 の「まとまり・協力」、Q2 の「文化・伝統をめぐる葛藤」と Q3 の「文化・伝統の継承・発展」、そして Q2 の「生活・自然環境の向上/劣化」と Q3 の「生活・自然環境の保持・向上」の 3 者はそれぞれ、「人づきあい」「文化・伝統」「生活・自然環境」という要素に統合できることが分かる。さらに、Q3 の「地域自治能力の

向上「次世代育成」を「地域自治の発展」とまとめると、Q2の「地域自治能力の低下」とあわせて「地域自治能力」という要素に統合できることが分かる。これらを踏まえQ2, Q3回答のKJ法による分類結果は表6に示すように「人づきあい」「文化・伝統」「生活・自然環境」「地域自治能力」の4要素に統合できる。さらに上記の4要素間の関係性を考察すると、次のように考えられる。「生活・自然環境」と「文化・伝統」は共に共同体の中核にあり住民が持続・発展させたいと望んでいるものである。それらを実際に支えていく力が「地域自治能力」であり、その際に共同体の住民たちを束ね上げる潤滑油になるのが「人づきあい」であると言えよう。つまり、白保住民たちの理想の共同体像とは、「生活・自然環境」「文化・伝統」を持続・発展させていくために「地域自治能力」と「人づきあい」がよく機能している状態を指していると解釈できる(図7)。

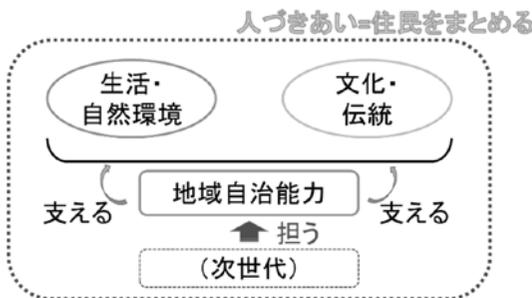


図7 白保住民の共同体像の4要素の関係図

4. 議論

本稿では共同体像の中核に「生活・自然環境」と「文化・伝統」があり、それらを持続・発展させることを白保住民たちは望んでいるという解釈を示した。この解釈にもとづき、移住者が地域に受け入れられるための鍵もまた、この共同体の「生活・自然環境」と「文化・伝統」の持続・発展に貢献するような言動の実践であると提言したい。以下、本稿の結果と石垣島を対象にした類似テーマに関する先行研究¹⁰⁾²⁰⁾を併せ活用しながら、現代沖縄村落における移住者を含めた地域活性化にとって重要と考えられる示唆について論じる。

上村と山崎²⁰⁾は同村落において、他県からの移住者の中で公民館活動を補助する幹事役に選任された者たちに関し、「PTA活動やその他の地域活動(陸上大会、祭りなど)への積極的な参加・協力の実績が評価され選任されている」と記している。この報告を本稿の結果にもとづく上記の提言と併せ考えると、村落の要職(公民館活動の幹事役等)に選任されるような住民たちは、地域活動への積極的な協力を通し共同体の「生活・自然環境」と「文化・伝統」の持続・発展に貢献したために地域から受入れの度合いを増したと解釈可能である。また、上村と山崎²⁰⁾がPTA活動を例示の最初に挙げているが、「次世代」の存在の重要性は本稿の結果からも示唆されていたと言える。つまり、Q3回答の分類の結果にも示される通り(表6)、将来の村落にとって重要なものとして「次世代育成(出現回数17)」は「まとめり・協力(出現回数30)」に

表6 Q2, Q3回答の分類結果のKJ法による統合化

Q2	出現回数	Q3		出現回数	統合した要素名
人づきあいの変化	29	まとめり・協力		30	人づきあい
文化・伝統をめぐる葛藤	8	文化・伝統の継承・発展		16	文化・伝統
生活・自然環境の向上/劣化	24	生活・自然環境の保持・向上		12	生活・自然環境
地域自治能力の低下	7	地域自治能力の発展	地域自治能力の向上	12	地域自治能力
			次世代育成	17	

次ぐ上位 2 番目の頻出内容であった。白保地区においては 3 世代(例えば祖父母, 父母, 子)にわたり健在で「繁栄」している家が, 五穀豊穰や子孫繁栄を祈願するミルク(弥勒)行列を担うこととなっているが, 近年これを沖縄他島からの移住者の一族が担ったことがある。つまり次世代とは, 一見普遍的で不動かのように思える「系譜関係をその世界観の一部に持つ地縁的あるいは血縁的紐帯で結ばれた人びと」¹⁰⁾とそれ以外の移住者たちとの境界を「越境」し得る存在であり, ゆえに PTA など次世代育成活動への積極的貢献は移住者の地域融合にとって特に重要な役割を果たすものと推察できる。この次世代が有する先住者—移住者の境界の「越境可能性」は先住者にも強く認識されていることが示唆され, 吉田¹⁰⁾も先住者による村落の永続への強い願いとそれに伴う移住者の子どもたちに対する大きな期待感の存在に言及している。

本稿から示されるもう一つの重要な示唆は, 現代沖縄村落においては移住者の地域融合の鍵として「文化・伝統」の要素が「生活・自然環境」よりも重要性を増している可能性である。これは表 6 に示される Q2, Q3 回答の分類結果の統合結果から導くことのできる考察である。つまり, Q2 結果では「文化・伝統をめぐる葛藤」の出現数は 8 回であったのに対して Q3 結果での「文化・伝統の継承・発展」の出現数は 16 回に上昇し, 他方で「生活・自然環境の向上/劣化」は Q2 で出現数 24 回であったのに対して Q3 で「生活・自然環境の保持・向上」は 12 回に減少した。この結果から, 現代の村落において住民をまとめあげる媒介として祭や行事といった「文化・伝統」の要素が重要性を増していることが示唆される。その一因として, 3.1 でも述べたように現代の石垣島および白保地区では就業構造の多様化により村落のかつての(農業)生産共同体としての意味合いが低下し, そのような中で生産手段(職業)に関わらず

すべての住民に共有可能な「文化・伝統」の重要性が相対的に増していることが挙げられるのではないだろうか。吉田¹⁰⁾の論稿においても, 伊原間地区において御嶽の合祀と氏子集団の改編がなされ, それに伴い氏子集団への帰属方式も系譜関係の有無に関わらず居住地域に従って認められるようになったことが報告されている。これについて吉田は「そこに暮らす人々の団結と村落への帰属意識を生じさせるための柔軟な対応」と論じている。つまり現代沖縄村落において, 祭・行事などの「文化・伝統」は出自や生産手段を異にする多様な住民たちのまとまりを形成するという機能を獲得している可能性が示唆されていると言えよう。ただしここで同時に注意が必要なのは, この「文化・伝統」とは無制限に移住者を受容するものではないという点である。白保では村落の文化の中核を成す御嶽の中で行われる神事などは基本的に先住者の血族のみに担われ, 「系譜関係をその世界観の一部に持つ地縁的あるいは血縁的紐帯で結ばれた人びと」の中心性は守られている¹³⁾¹⁴⁾²⁶⁾。これは「文化・伝統」の性質上, その中核部分には一定の「閉鎖性」が保たれるべきであることを示唆していると言えるだろう。吉田¹⁰⁾も言及するように, 文化の「中心性」が保たれるべき程度はそれぞれの村落が置かれている経済社会的状況(過疎化の進行度合い等)によっても影響を受けると考えられる。現代沖縄村落への移住者の融合について検討する上で, 「文化・伝統」に関わる中心性保持の程度については今後も注意深い研究の蓄積が望まれる。

最後に, 本稿で用いた方法論に関しても考察を行う。本稿では過去と比較した現在, 現在と比較した将来, という 2 方向から村落に対する認識を尋ねることにより, 双方の結果を相互に検証材料とできるように考慮した。その結果, 3.8 で示したように Q2, Q3 で抽出された共同体像の要素は

共に「人づきあい」「文化・伝統」「生活・自然環境」「地域自治能力」の4要素に統合することができた。これは、本稿で使用した自由記述法の質問項目が住民たち自身による共同体像を表出させるのに妥当なものであったことを示していると考えられる。沖縄に限らず人の流入が増加する現代の村落社会では、移住者を含む住民たちが共同体をどのように認識しているのかを理解することが地域活性化、自然資源管理などの施策検討において重要な土台を提供する。そのため、本稿で示した手法を活用し他地域においても住民の視点による共同体像の理解が進んでいくことを期待したい。

5. 結語

本稿は沖縄の現代村落において移住者の地域融合のために重要な要因について提言した。今後沖縄の他村落や日本本土の農山漁村における事例研究が蓄積し、それらとの比較検討により議論が精緻化していくことを望む。また、沖縄に限らず島嶼地域は一般的に、豊かな文化と強いアイデンティティを有しているとも指摘されている²⁸⁾。現代沖縄村落が直面する、移住者を含む住民たちが如何に地域の豊かな文化とアイデンティティを持続・発展させつつ共同体を再構築していくかという課題は、国際的な島嶼研究の文脈の中で新たに位置づけられることが有益であろう。そのことはまた、国際色豊かな歴史・地理条件など沖縄が持つ地域特性を生かした¹⁾当地域の発展の土台を創っていくことにもつながるであろう。

謝辞

本研究は科研費(新学術領域研究)新海洋像：その持続的利用を図る国際レジーム(課題番号24121010)および東京大学海洋アライアンス総合海洋基盤(日本財団)プログラムの助成を受けて実施した。関係各位に記して深謝する。

注

- 1) 白保地区の母集団については総務省統計局²⁵⁾の公表値を用いた。出身地別人口構成比については公表値がなかったため、Sugimoto¹⁴⁾で公表されている白保公民館長聞き取りにもとづく数値を用いた。

引用・参考文献

- 1) 沖縄県：沖縄 21 世紀ビジョン基本計画(沖縄振興計画平成 24 年度～平成 33 年度), <http://www8.cao.go.jp/okinawa/3/32.html#okishin1-1>, 2012. (最終閲覧日: 2017/11/12)
- 2) 筒井一伸, 佐久間康富, 嵩和雄: 都市から農山村への移住と地域再生, 農村計画学会誌, 34(1), pp45-50, 2015.
- 3) 加藤潤三, 前村奈央佳: 沖縄の県外移住者の適応におけるソーシャルキャピタルの影響, 人間科学=Human Science(31): pp111-143, 2014.
- 4) 柴田建: 移住者の受け入れと地域継承の課題-移住ブームが続く沖縄・裏石垣からの報告-, 都市住宅学 89 号: pp18-23, 2015.
- 5) 須藤直子: 沖縄へ移住する若者たち-桐野夏生『メタボラ』にみる移住者像-, ソシオロジカル・ペーパーズ第 25 号: pp17-34, 2016.
- 6) Hillery, G. A.: Definitions of community: Areas of agreement, Rural sociology 20(2): pp111-123, 1955.
- 7) Agrawal, A. and Gibson, C. C.: Enchantment and Disenchantment: The Role of Community in Natural Resource Conservation, World Development, 27(4): pp629-649, 1999.
- 8) 多田治: 沖縄イメージの誕生-青い海のカルチュラル・スタディーズ-, 東洋経済新報社, 東京, 2004.

- 9) 太田好信：トランスポジションの思想-文化人類学の再想像，世界思想社，東京，1998。
- 10) 吉田佳世：村落（シマ）的世界を再考する-八重山群島石垣島・伊原間集落における移住者と先住者の関係をめぐって-，東京都立大学人文学部人文学報，2010。
- 11) 宮城能彦：沖縄村落社会研究の動向と課題-共同体像の形成と再考-，社会学評論 67(4)：pp368-382，2017。
- 12) 石附馨：ヤマトウンチュ嫁試論-現代沖縄の“生活者たち”を考えるために-，日本民俗学 (231)：pp67-96，2002。
- 13) 杉本あおい：村落（シマ）の内と外をつなぐサカナ-沖縄県石垣島白保集落の漁労活動および漁獲物分配に着目して-，東京大学大学院農学生命科学研究科修士論文，2012。
- 14) Sugimoto, A. : Fish as a 'bridge' connecting migrant fishers with the local community: findings from Okinawa, Japan, Maritime Studies 15(1):pp1-14, 2016.
- 15) 須賀伸介，大井紘，原沢英夫：自由連想調査とクラスター分析による水辺に対する住民意識の研究，土木学会論文集 No. 458/IV-18: pp91-100，1993。
- 16) 樋口耕一：テキスト型データの計量的分析-2つのアプローチの峻別と統合-，理論と方法 (Sociological Theory and Methods) 19(1)：pp101-115，2004。
- 17) 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析，京都，ナカニシヤ出版，2014。
- 18) 川喜田二郎：野外科学の方法，東京，中央公論新社，1973。
- 19) 川喜田二郎：発想法，東京，中央公論新社，2006。
- 20) Kohonen, T.: The self-organizing map, Neurocomputing 21: pp1—6, 1998.
- 21) Lazarsfeld, P. F. and Barton, A. H.: Qualitative Measurement in the Social Sciences Classification, Typologies and Indices, Lerner, D. and Lasswell, H. D., ed.: The Policy Sciences: Recent Developments in Scope and Method, Stanford CA Stanford University Press pp180-188, 1951.
- 22) Pool I. de S. ed. : Trends in Content Analysis, Urbana, IL, University of Illinois Press, 1959.
- 23) 稲葉光行，抱井尚子：質的データにおけるグラウンデッドなテキストマイニング・アプローチの提案-がん告知の可否をめぐるフォーカスグループでの議論の分析から，政策科学 18(3): 255-276, 2011.
- 24) 石垣市：統計いしがき 38, <http://www.city.ishigaki.okinawa.jp/home/kikakubu/kikaku/toukei/h26/all.pdf>, 2015. (最終閲覧日 2017/11/12)
- 25) 総務省統計局：平成 27 年国勢調査 <http://www.estat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do>, 2015. (最終閲覧日 2017/11/12)
- 26) 上村真仁，山崎寿一：沖縄県石垣市白保集落における自然環境保全と地域づくりの仕組み-地域住民の来歴に着目して-，日本建築学会住宅系研究報告会論文集 10, 2014.
- 27) 仲松弥秀：神と村，東京，新泉社，1990。
- 28) Coulthard, S., EVANS, L., Turner R., Mills D., Foale S., Abernethy K., Hicks C., Monnereau, I.: Exploring 'islandness' and the impacts of nature conservation through the lens of wellbeing , Environmental Conservation May, pp1-12, 2017.

Capturing the representation of rural community from the perspective of local residents in Okinawan island: Implication for building social cohesion among locals and immigrants in rural communities

Aoi SUGIMOTO, Hiroaki SUGINO, and Nobuyuki YAGI

ABSTRACT : The regional development of Okinawa has been regarded as an important issue among Isolated Islands Promotion policy in Japan. Even though the immigration is recognized as one of the effective means to promote the rural development, the conflicts also have been reported in Okinawan communities. Given such circumstances, it is urged to understand how local residents recognize their communities including both locals and immigrants, in order to promote the region's development. This paper, therefore, aimed to capture the representation of community from the local residents' perspective by utilizing the free answer questionnaire, and to suggest important factors for building social cohesion among them. Text data was collected in Shiraho village, Ishigaki, and content analyzed quantitatively and qualitatively. As a result, we suggested the residents' representation of community as follows: ideal community keeps developing the "living/natural environment" and "culture/tradition", being well supported by the "local governance capacity" and "social relationships". Based on the results, the factors for growing social cohesion among residents in Okinawan communities was discussed.

KEYWORDS : *representation of rural community, Okinawan communities, locals and immigrants, quantitative and qualitative text content analysis*

著者紹介

杉本 あおい(学生会員)

東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程
東京都文京区弥生 1-1-1,7 号館 B 棟 5 階 国際水産開発学
研究室,日本サンゴ礁学会,日本水産学会会員。

E-mail: aoi.sugimoto19@gmail.com

八木 信行(非会員)

東京大学大学院農学生命科学研究科教授, 博士(農学), 日
本水産学会, 国際漁業学会会員。

E-mail: yagi@fs.a.u-tokyo.ac.jp (住所同左)

杉野 弘明(正会員)

東京大学大学院農学生命科学研究科特任助教, 博士(人間環
境学), 人間環境学会・土木学会会員。

E-mail: a-sugino@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp(住所同上)